



**A** エリート男子がスタートした瞬間。ここから芝生のループを周回して上りに入るが、ほとんどゴールスプリントのような迫力だ **B** フランスからやって来たジュリアン・アブサロン・ファンクラブのメンバー。国歌斉唱では全員が大声で歌い、勝利に酔った **C** レース序盤の先頭集団。この2週間前にマラソン世界選手権を制したラルフ・ナフ(ゼッケン08)とジュリアン・アブサロン(ゼッケン01) **D** トップを独走するガン・リタ・ダール。最終的には2位のイーナ・カレンティエバに3分近く差を付ける圧倒的な勝利となった **E** 36歳となったMTBレース界のレジェンド、風格さえ漂うトーマス・フリッシュケネヒトは6位でゴール。その力は衰えることを知らない **F** ライバルに打ち勝つには自分の限界を出し切る必要があると考えた結果、あえてハートレートモニターを使用しなかったと述べたアブサロン

女子エリートには現在国内で敵なしの片山梨絵(トレック)が出場。レースはガン・リタ・ダールが圧倒的な強さで勝利、自身7枚目のアルカンシエルにソテを通した。片山は一時20位台前半を走りながらもハンガーノックに見舞われ、34位の同一周回でゴール。「後半タレてしまいましたが、以前はタレることさえありませんでしたから……」と、悔しさをにじませながらも、一定の収穫を得たとレース後に述べた。

特筆すべきは中国人選手が1位でゴールしたことだ。女子U23でも優勝しており、中国はナショナルチームとして国を挙げて北京五輪に向け

XCレースはロトルアのダウンタウンからすぐ北側の、ロトルア湖を見下ろすノングタハ山にある1周5・9kmの周回コースで行なわれた。スタート直後から最高地点までスイッチバックで一気に上り詰めた後、芝の丘を一気に下り、再び上りに入ったあとは森の中の人工的なドロップオフなどが設けられたシングルトラックを走ってゴールに戻る。



**RESULT**

XC男子エリート	
1	ジュリアン・アブサロン(フランス) 2時間9分7秒
2	クリストフ・サウザー(スイス) +43秒
3	フレドリック・ケツシアコフ(スウェーデン) +1分58秒
4	ラルフ・ナフ(スイス) +4分22秒
5	ヘクター・レオナルド・バエス・レオン(コロンビア) +4分51秒
6	トーマス・フリッシュケネヒト(スイス) +5分19秒

XC女子エリート	
1	ガン・リタ・ダール(ノルウェー) 1時間55分19秒
2	イーナ・カレンティエバ(ロシア) +2分45秒
3	マリー・ヘレン・ブレモン(カナダ) +4分22秒

強化に乗り出しており、多くのスタップをコース周辺で見かけた。全額自腹参加の日本チームとはあまりに違うその恵まれた環境に、日本人選手も危機感を感じていたようだ。

男子は7周回で争われ、竹谷賢二(スペシャライズド)、小笠原崇裕(Ogasayasu)、白石真悟(シマノドリンキング)が出走。小笠原はコンディションが悪く、早々にレースを去ってマイナス4ラップの73位。新型XTRフルコンポで挑んだ白石はマイナス3ラップの66位、竹谷はマイナス2ラップの55位となった。

白石はレース後に冗談めかしながら「今後の身の振り方を考えます」とコメントして、世界との圧倒的なスピードの差を表現した。竹谷は「優勝したアブサロンはジュニア、U23と徐々にステップを積んできま

した。この差は今日、明日で埋まるものではないですね」と持てる力を出し切った結果であることを述べ、想定内の順位であったと分析した。

トップ争いは、ジュリアン・アブサロン、クリストフ・サウザー、ラルフ・ナフらがトップ集団を形成するが、5周目の頂上ではアブサロンが後続を振り切って16秒の差をつける。しかし、最終周回ではアブサロンとサウザーが再び合流して一騎打ちとなり、上りでアブサロンがアタックをかけてサウザーを振り切り、43秒の差をつけてフィニッシュラインを通過した。「世界選のタイトルは今年の目標の1つでした。私はすべての記録を破ることに興味を持っており、私自身とこのジャージのために勝利し続けたいと思います」とゴール後にコメントした。



# MTB 男子XCは J・アブサロンが 3連覇!

## 世界選手権

MTB世界選手権の舞台はニュージーランド北島、オークランドから東南に230kmの場所に位置するロトルア。男子XCエリートでは、J・アブサロンが敵なしの3連覇を達成した。

日本人選手は山本幸平(XC・U23)の20位が最高

2006UCI MTB世界選手権大会  
開催日●8月22日~27日 開催地●ニュージーランド・ロトルア  
text●aisuke MORIMOTO  
photo●aisuke MORIMOTO/Koji OISHI





●Jシリーズで頭角を現わしつつある、U23の山本幸平(左)と小野寺健(右)。今大会でも世界に近い走りを見せた2人だが、日本人選手最高位をマークした大器・山本にとんだトラブルが待ち受けていた

# より機能的な組織作りを 2006MTB世界選手権の ウラ事情

監督・西井 匠のインサイドレポート  
text●西井 匠

世界選手権に限らず、海外遠征には常にトラブルがついて回る。今回の遠征でも数多くのトラブルが発生したが、それに対し日本チームはどのように取り組んだのか。山本幸平(国際アウトドア専門学校)の例とともに、2006MTB世界選のウラ事情をお届けしたい。

山本に降りかかったトラブルは、UCIポイントがスタート順に反映されておらず、最後尾からのスタートになってしまったことだ。これでは実力どおりの結果を出せない。

しかしなぜ彼は、UCIポイントが0点になっていたのか。その原因は名前の表記方法にあった。選手登録の際、彼だけは名字と名前が入れ替わっていたのだ。つまり、Kohji Yamamotoが、Yamamoto Kohjiになっており、別人として扱われていたのだ。

監督としては選手の権利を守るために、正しいスタート順になるよう主張しなければならぬ。残された時間はわずか半日だった。

とはいえ、何の脈絡もなく突然コミンセルに主張しても、聞き入れてもらえる可能性は低い。そのためには証拠が必要不可欠なのだ。議論の末に出た答えは、UCIのサイトにアクセスし、最新のランキングを入手することだった。何人かの選手に協力してもらい、監督会議直前までギリギリの作業が続けられた。

幸いにして、ホテルで最新ランキングを確認することができた。コミンセル陣も自身の目でランキングを確認し、われわれの主張が正しいことを認めた。問題を無事解決して、私は大きく息を吐いた。

交渉の結果、山本のスタート順は67番から42番まで上がった。実力どおりのスタート順となり、彼は本来の力強い走りを見せた。残念ながら10番台まではあと一歩届かなかったが、U23クラスにおいて日本人過去最高位となる20位(出走64人)の成績を収めた。レース後にコミンセルから、「あの日本人選手はいい走りだったな」と言葉をもらったことが何よりだった。

今回の一件は、レース以外の時間でもチームワークを発揮した、すばらしい連携だった。

しかしそれ以外の面では、スタッフ不足による連携の悪さや、事前調査の不備など、数多くの問題点が目立った。これらの問題点を反省材料に、今後はより機能的な組織作りを目指したい。

組織の強化が、世界に通用する選手を育てることもつながるはずだ。

## RESULT

<b>XC男子エリート</b>	
55 竹谷賢二	-2ラップ
66 白石真悟	-3ラップ
73 小笠原崇裕	-4ラップ
<b>XC女子エリート</b>	
34 片山梨絵	+26分6秒
<b>XC男子U23</b>	
20 山本幸平	+12分31秒
32 小野寺 健	+15分7秒
<b>XC男子ジュニア</b>	
35 竹之内 悠	+10分34秒
<b>DH男子エリート</b>	
39 井手川直樹	+27秒33
<b>DH男子ジュニア</b>	
23 門脇 祥	+20秒20
37 永田隼也	+30秒01
<b>4X男子</b>	
33 栗瀬裕太	
<b>4X女子</b>	
DNS 末政実緒	



●ハンガリーで見舞われながらも、トップと同一周回の34位でゴールした片山梨絵

●白石は「今後の身の振り方を考えます」と、ジョーク交じりに世界との圧力的な差を語った

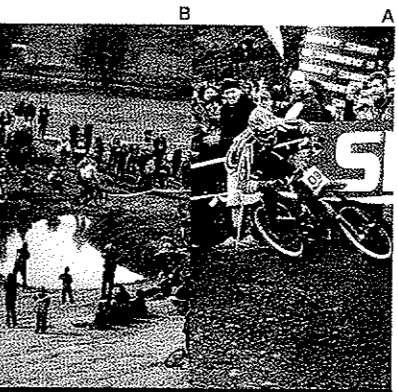


●全日本DHチャンピオン・井手川直樹は、トップから約27秒遅れの39位に終わった

●竹谷賢二がマイナス2ラップ。この結果が、世界と日本との差を何よりも物語る



# DH男子エリートはG・ミナーを抑え サム・ヒルが大差で優勝!



A. 昨年3位のグレッグ・ミナーは2位に終わる。ゴール後「イッツ・オーケー」と残念な表情を見せた。来年こそは……?  
B. スタート直後に設定された約10mの池越えジャンプを飛び門脇祥、決勝23位でゴール。向こう側にエスケープがある  
C. ゴールドに塗られた世界選スペシャルのバイクでジュニアでの勝利と合わせて世界選手権2勝目を達成したサム・ヒル



RESULT

<b>DH男子エリート</b>	
1 サム・ヒル(オーストラリア)	3分11秒03
2 グレッグ・ミナー(南アフリカ共和国)	+4秒22
3 ネーザン・レニー(オーストラリア)	+6秒13
4 スティーブ・ビート(イギリス)	+6秒89
5 クリス・コヴァリック(オーストラリア)	+7秒01
6 ミック・ハナー(オーストラリア)	+8秒18
<b>DH女子エリート</b>	
1 サブリナ・ジョニエ(フランス)	3分50秒32
2 トレーシー・モズリー(イギリス)	+3秒51
3 レイチェル・アサートン(イギリス)	+7秒48

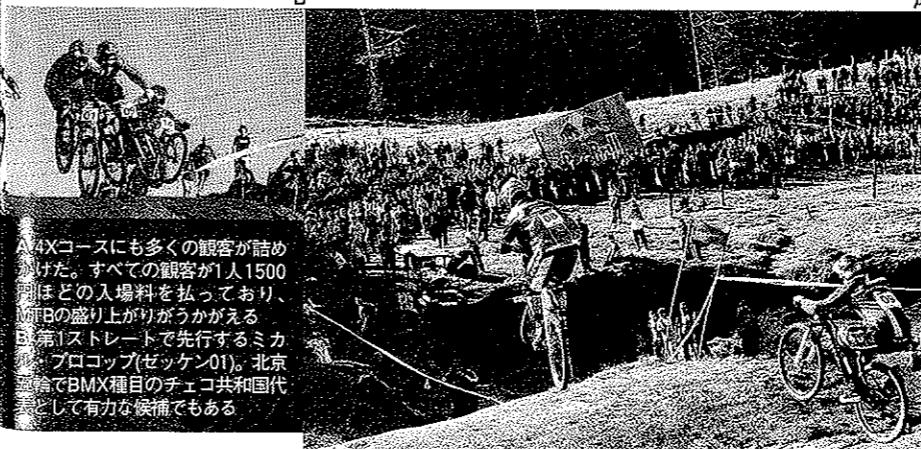
DHはノンゴタハ山の頂上付近からスタートする全長2・2kmの常設コースを使用した。最初の森を出た直後は高速セクションで、ペダリングが要求されるためにほとんどのライダーが普段のW杯では嫌って使用しないスキンスーツを着用した。

ジュニア男子では全日本の覇者である門脇祥(モンスタースターライダース)が23位、永田隼也(23ディグリー)は2度の転倒により37位となる。

優勝は地元のカメロン・コール、2位にもサムエル・ブレンキンソップが入り、ジュニアの層の厚さを示した。女子の末政実緒(大川組)は練習走行中にコース上部の芝生エリアにあるステップダウンのジャンプで転倒、肩の靭帯を痛めてシューティングラン(予選をDNSとなる。女子決勝はシューティングで1位となった今季好調のトレーシー・モズリーをサブリナ・ジョニエが逆転、優勝を飾る。3位にはW杯ブラジル大会で初優勝を挙げているレイチェル・アサートンが入った。

男子のシューティングではネイザン・レニーが1位となり、2位にステイブ・ビートが入る。ビートは世界選で未勝利、まさに鬼門となっている。決勝は予選6位のサム・ヒルがクリス・コヴァリックのタイムを7秒上回ってホットシートに座り、残り5人のライダーを待つ。グレッグ・ミナー、ステイブ・ビートもそのタイムを上回ることができず、最終走者のネイザン・レニーを待つばかりとなるが電光掲示板に表示されたタイムは3位を示し、サム・ヒルの優勝が決まった。

# 4X男子は ミカル・プロコップが貫禄の勝利!



RESULT

<b>4X男子(ファイナル)</b>		<b>4X女子(ファイナル)</b>	
1 ミカル・プロコップ(チェコ)		1 ジル・キントナー(アメリカ)	
2 ロジャー・リンダーネヒト(スイス)		2 アネック・バーデン(オランダ)	
3 グイド・チュック(ドイツ)		3 アニータ・モルチック(オーストリア)	
4 ダン・アサートン(イギリス)		4 ヤナ・ホラコバ(チェコ)	

ロトルアの4Xコースは、世界選という格式高いレースにふさわしいものだった。2コーナーを立ち上がってからの斜度のある巨大な3連に、順位の入替わりが多くあったS字コーナー、巨大ウォールなど、かつて例のないレイアウトだった。

日本からは栗瀬裕太(MX/マンダース)が参戦したが、予選の1コーナーでスリップダウンして痛恨の子選落ちとなる。女子はジル・キントナーが昨年に続いて危ない走りでも2枚目のアルカンシエルを獲得。男子は予選を1位で通過したミカル・プロコップが「ミスター・ホールショット」のニックネームにふさわしいスタートダッシュで他を圧倒、プロコップ最大のライバルといえるブライアン・ロブスは、セミアイナルでロジャー・リンダーネヒトに先行を許し、2コーナーでインから来たプロコップと同じチェコ共和国のマイク・マロッシとラインが交錯して転倒、スモールファイナルに進んで8位に終わってしまう。

決勝でもプロコップはスムーズなスタートで先行し、最後までだけの背中も見ることなく優勝を決めた。